

見つめる鍋は煮えない

山本助産院

山本 詩子

マタニティーブルー

私は12歳の長男、9歳の次男、5歳の三男の母親である。子どもは同じ親が生み育てているのに三人三様実に個性的で楽しませてくれる。

思いおこせば、長男の子育ては大変であった。おっぱいをうまく吸えない、飲む量が少ない、乳頭亀裂の激痛に会陰の疼痛、後陣痛、不眠、などなど。夜泣きに悩まされ、連日夜勤明け気分を味わった。ポーッとしながらも自分の中で刻々と変化してゆく様子を学びとしてとらえていたものだった。「なるほど、これがお産か」と、妙に納得していた。

生後1か月頃までは助産婦経験が物をいう。沐浴から授乳までは大変ながらもクリアした。しかし、そのあとがいけなかった。2か月目、3か月目と赤ちゃんの乳房がどのように変化するのか見たことがなかったのだ。

1か月を過ぎると、とたんに乳緊がなくなり、小さくなったおっぱいにギャラリー(母)から声がかかる。「おっぱいが足りないのよ。ミルク足してあげなさい。かわいそうに」

母乳不足を感じ、ミルクを少し足してみる。ごくごく飲む。「ほら、やっぱり足りないのよ」すかさず、あいの手が入る。

母乳の次の難関は離乳食。飲みの悪さが後を引き、食べてくれない。いやがる口にスプーンを押しつける。

その頃は、おっぱい、うんちにあげくれる毎日、洗濯機の中でぐるぐるまわる洗たく物をじっと見ていて“はっ”と我に返るようなことがよくあった。「ひょっとしてこれがマタニティーブルーなの？」

楽しい育児

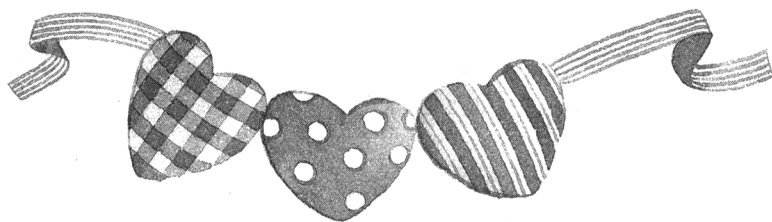
次男は骨盤位だったため「帝王切開しましょう」と言われたが、「大丈夫だから経腔でお願いします」と希望を言った。なかなか第1啼泣が聞かれない。その時のアプガースコアは8点であった。

3700g、骨盤位で誕生した次男は顔もすごい。よく飲み、よく眠ってくれた。離乳食もバクバク食べて喜ばせてくれた。

次男のとき初めて育児の楽しさを知ったように思う。長男の時には寝返りした日、歯が生えた日、歩いた日、テーブルより背が高くなった日など、一つひとつが記念日のように記録してあるが、次男は、いつの間にか首が座り、気が付くと、とうにテーブルより背が高くなっていた。写真の枚数も長男のときと比べて激減し、育児の楽しさのなかに、あつという間に大きくなったという印象で、じっくり成長を見守った記憶がない。

自然卒業

三男の時「次は4kgの巨大児ね」と言われた私は、なにがなんでも体重コントロールをしなけれ



ばと思った。

体重は7kg増加して2700gの三男が誕生した。今度こそはじっくり成長の過程を楽しもうと思った。

無条件にかわいいと思い、日々の変化を存分に楽しんだ。また、完全母乳で自然卒業を体験してみようと思った。

長男の時には、お水と肥料を与えてでも早く大きくしたいと思ったが、次男、三男の時には、もう少しこのままでいてほしいと思うのにどんどん大きくなって、矢のように時は過ぎていった。

「啓ちゃん、いくつになったらおっぱいやめるの?」と聞くと小さな指を3本立てた。3歳になったとき、「今日で啓太は3歳だからおっぱいおしまいね」と言うのと「ぼく4歳になったらやめるよ」と1年乳離れが延期になった。4歳になったとき、「今日は4歳のお誕生日だよ。啓太君おっぱいどうする」と尋ねると、今度は「ぼく4歳だから、おっぱいもういらないよ」と答えた。

その日からあんなにおっぱいがないと眠れなかった子が実にあっさりと一度もおっぱいを吸ってくれなくなった。

淋しくなって、「おっぱい吸って」と追いかけてまわす私に、「仕方ないなあ。ペロッてするだけだよ」と言う。それでもニコニコうれしそうな顔でおっぱいをなめてくれた。お兄ちゃんたちにひやかされながらも「おっぱいもみもみ」などと言いながら時折感触を楽しんでいるようだった。

子供は宝

長男が小学校1年生の時に担任だった先生が、「見つめる鍋は煮えない」という言葉を教えて下さった。

子育ては、のんびり、じっくり。あせってはいけなないと。3人の子育てを通して、つくづく、「見つめる鍋は煮えない」という言葉をかみしめている。

助産婦になって15年、最近ようやく助産婦の仕事が見えてきた。

お産も育児も、あせらず、じっくり待とう。万葉集に山上憶良が詠んだ“^{しろがね ぐがね}銀も金も玉も何せむに、まされる宝子にしかめやも”。この歌のように私の助産婦活動を支えて、ヒントを与えつけてくれる子供たちは、まさに宝物である。

助産婦はここにいますよ

「助産婦はここにいますよ。お産のことも、おっぱいのことも、なんでも相談して下さい」少産少子の時代だからこそ、大切なお産、大切な子育てに、いつでも助産婦は手をさしのべます。

そんな気持ちが集まって、横浜助産婦ネットワーク“SANBA”が発足しました。“SANBA”では、前回の「りれー随筆」、坂田美穂子さんをはじめ、横浜の助産婦たちが頑張っています。

次回は仲間の羽田野助産婦にお願いします。